



水を打った賑わい

(打ち水大作戦はいかに拡がったか)

ルールは至ってシンプル。お風呂の残り湯や溜めた雨水を使うこと。そして、みんなでそれを一斉に撒いて、東京の夏を2℃下げよう！

そんな呼びかけで2003年に行われた「大江戸打ち水大作戦」。当時、様々なメディアがこぞって採り上げたので記憶に留めている方も少なくないでしょう。この運動は翌年、名称から「大江戸」の文字が外され、ターゲットを全国および海外に拡げて展開され、今年で10回目を迎えようとしています。

打ち水はご存じの通り、庭や路地に水を撒いて涼気をとる昔からある習慣です。筆者が幼少の頃は当たり前のように見られた光景です。

ところが長く続いた習慣も、生活様式の変化によって類廃することがあります。打ち水もその道を歩むのではないかと見られましたが、前述の大作戦が多くの人の関心と支持を集めたことにより、完全に息を吹き返した感があります。これはあくまで推計値ですが、毎年コンスタントに500万人近い人たちが打ち水大作戦に参加するというから驚きです。

では一体なぜ、打ち水はこのように再び多くの国民から受け入れられることになったのでしょうか。その問いに対する答えは、「打ち水大作戦のデザイン」（毎日新聞社）という本の中に見つけることができます。

同書のまえがきによれば、打ち水大作戦は「デザイン」なのだといいます。この場合のデザインとは完成した造形物や図版を指すのではなく、「現実をつくりだす生きた運動体」のことです。例えば、「うちみず」を知らない若者にどう伝えるか。これもデザインの1つの試みです。“打水”という従来の表記では、今の若者が正しく発音してくれない可能性もあります。そこで、あえて送り仮名を入れて“打ち水”としたことが、“過去の習慣”に新しい命を吹き込んだのだと、同書は記しています。そして、あたかも投じた石が波紋を拡げるかのように、この運動体は大きくなっていったのだといいます。

打ち水大作戦に立ち上げ当初から携わってきたNPO法人日本水フォーラムのマネージャー・浅井重範氏によると、同大作戦が産声を上げた2003年当時から、すでにボランティアを志願する人たちが多数いたそうです。特に環境活動家やクリエイターと呼ばれる人たちが多く、また学生の姿も目立ったといいます。もともとこの運動のきっかけになったのは、国土交通

省土木研究所（当時）の研究員がヒートアイランド対策のためにまとめた試算です。そこに記された、都心の気温を2℃下げるための散水のシミュレーションが、多くの人々の好奇心を刺激したのです。

「突飛であるけれど魅力的で面白い。それでいて社会の役に立つ。そうした要素を兼ね備えていたからこそ、打ち水大作戦は草の根的に拡がっていったのだと思います」。浅井氏はそう話してくれました。

振り返ると、2000年代初頭は新しい情報拡散ツールとしてブログが登場するなど、ネット社会の構造が大きく変わろうとしていた時期でした。自身も打ち水の魅力にはまり、秋葉原で打ち水の運動を主催する真田武幸氏（NPO法人秋葉原で社会貢献を行う市民の会リコリタ理事長）は、「当時はみんなが共有したくなるネタが、ネットで拡散する現象が生まれた頃だった」といいます。例えばそれを象徴する出来事として、UDがん研究プロジェクトにおける“Team 2ch”の活躍があります。このプロジェクトは白血病やがんの解析プログラムを動かすため、世界中のパソコン（PC）ユーザーから個々が所有するPCの余力を提供してもらい、その小さなCPUの能力をネットでつなげてスーパーコンピューター並の処理能力を確保する計画でした。同時に、プロジェクトへの貢献度を表示する機能が用意され、世界中のチームが順位を競い合う楽しさもあったことから、日本では2ちゃんねるという掲示板において「世界一を獲ろうぜ」という旨の書き込みがなされました。この呼びかけに多くの“2ちゃんねらー”が応じ、Team 2chとして力を集結した結果、見事にその目標を達成したのです。

このように、出逢ったことのない人たちがネットでつながり、途方もない夢みたいなこと、あるいは馬鹿げた出来事などを起こす動きが生まれたのが2000年代前半でした。その時代性を理解し、「東京の気温を2℃下げよう」と楽しげな呼びかけでスタートを切ったことが、今日の打ち水の盛り上がりにつながったといえそうです。

そして、なによりも水には触れることの楽しさがあります。先述の浅井氏に打ち水の魅力は何かと伺うと、「打ち水をした後の爽快感で、みなさんが笑顔になることです」と答えてくれました。参加者は老若男女さまざま。昔を懐かしみながら水を撒く方もいれば、一方で、普段着る機会が少ない浴衣やハッピーのファッ

ションを楽しむ若者もいます。このように思い思いのスタンスで年齢も職業も違う人たちが同じ時・同じ場所に集まって共同作業をすることは、コミュニティーの再生にもつながるのではないかと、期待せずにいられません。

キャンドルナイトなど様々な環境行動とコラボレーションしやすいのも打ち水の長所。実践の場はますます拡がっているようです。



秋葉原で日頃活動している人たちが参加する、リコリタ主催の打ち水大作戦（うち水っ娘大集合！）。メイド服と打ち水の組み合わせが目を引きま



福岡市大名紺屋町商店会は通りに朝顔のプランターを並べて、打ち水を行いました。すると、それまで商店会を悩ませていた壁の落書きや違法駐輪がなくなったといいます。



パリのシャトレ広場で2006年に行った打ち水。パリは街中に中水が流れていることもあって、水に対する関心が高かったといいます。



多くのクリエイターに支えられている打ち水大作戦のポスターはいつも出色の出来栄え。ウェブサイトから自由にダウンロードできます。



オリジナルの手ぬぐいや八角桶は、打ち水の楽しさを演出する優れた広報ツールにもなっています。八角桶のユニークな形は、節目があって加工し難い間伐材を利用するために考案されたものだそうです。

なお、掲載した写真はすべて打ち水大作戦本部に提供していただきました。今年の打ち水大作戦は7月22日から8月23日にかけて行われる予定です（87頁参照）。

（筆者：中山 勲）